

京都東山

徳富蘇峰

五四

三十六峰雲漠漠
洛中洛外雨紛紛
破笠短褐來て涙も揮う
秋冷やかに殉難烈士の墳

【作者】徳富蘇峰（一八六三〜一九五七年）明治、大正、昭和の評論家、歴史家、漢詩人として有名である。熊本県水俣の出身。名は正敬（まさたか）、通称猪一郎（いいちろう）、蘇峰はその号。家は代々庄屋兼代官をつとめた。幼いときから熊本洋学校に学んで、のち同志社に移った。その後上京して、出版社を興し国民新聞を発行した。「近世日本国民史」は後年の作である。昭和三二年没す。九四歳。

【語釈】*洛中洛外：洛は京都のことをいい 京都の市中と郊外

*破短褐：：は笠 褐は布子（ぬのこ） 破れ笠に丈（たけ）の短いそまつな着物

【通釈】東山三十六峰は一面の雲に掩（おお）われてさびしく京都の町中も郊外も雨が降りしきっている。

この雨の中を破れ笠をかぶり裾の短い着物をきて、国難に殉じた志士達の墓前に涙を流してぬかずけば、秋気はこのほか冷々（ひえびえ）と肌感ずるのである。